

草山（陽明山）を歩く

片倉 佳史

台湾の首都として君臨する台北市。その歴史をたどってみよう。今回は台北郊外の景勝地、陽明山を取り上げてみたい。日本統治時代は「草山」を名乗り、避暑地としても知られていた。今もなお、多くの行楽客が訪れる台北近郊の探索スポットである。

戦前からの行楽地・草山

現在、陽明山と呼ばれているエリアは終戦まで「草山（そうざん）」を名乗っていた。台北の北側に位置し、標高 1000 メートル前後の地域を示している。草山、陽明山ともに具体的な山峰を示すのではなく、地域一帯を示す総称である。現在は行楽地としても知られ、週末には山歩きや花見、ハイキングを楽しむ人々で賑わう。

一帯には温泉も沸いている。しかも、日本統治時代は北投や関子嶺、四重溪などと並び、台湾四大温泉の一つにも挙げられていた。湯量が豊富だけでなく、温泉が広範な地域にわたって点在しているのが特色となっていた。硫黄を含み、白濁した湯は多岐にわたる効能を誇っているため、浴場施設やスパリゾートがいくつも見られる。

この地域には数多くの山峰があるが、主峰と目されるのは 11 座である。この地のシンボルと

なっていた紗帽山（634 メートル）のほか、大屯山系の最高峰でもある七星山（1119 メートル）、面天山（997 メートル）、竹子山（1103 メートル）などがあつた。

戦前に指定を受けた国立公園

この一帯は戦前からすでに国立公園の指定を受けていた。もともと 1926（大正 15）年に台湾日日新報が実施した「台湾八景」の公募で草山は台湾十二勝の一つとなっており、広く知られるようになっていた。

この公園は正式には大屯国立公園を名乗っていた。1937（昭和 12）年 12 月 27 日に発布された台湾国立公園協会の公示を受け、大屯、新高阿里山、次高タロコの三箇所が正式に指定されている。

大屯国立公園は総面積 8265 ヘクタールで、当時の国立公園の中では最小であった。それでも域内に含まれた範囲は広く、七星山や大屯山のほか、



陽明山は台北郊外の景勝地として親しまれている。中央は独特な山容を誇る紗帽山。



温泉地としてもその名を馳せている。陽明山中国麗緻大飯店の大浴場。



日本統治時代に発行された絵はがき。草山には泉源が複数点在しており、台湾最大の温泉域を誇っていた。



台湾国立公園協会が発行していた地図。北投や観音山も大屯国立公園に含まれているのがわかる。

淡水川（現淡水河）の対岸に位置する観音山も含まれていた。山々が連なる姿は秀麗で、噴火口やカルデラを数多く見ることができた。

また、このエリアには北投から金山にかけて、「金山断層」が走っており、地表の水が地下熱源によって加熱されて温泉となっている。それだけでなく、地殻の隙間から吹き出す噴気孔も見られ、中でも、大油坑や小油坑、馬槽などでは激しい噴出を見ることができた。

さらに、北投の温泉地を域内に含んでいたほか、竹子湖には蓬萊米原種田事務所、大屯山には高山気象観測所があり、淡水河や北麓の海岸線の景観

も知られていた（現在の陽明山国家公園には北投や観音山、淡水などは含まれていない）。

戦後を迎え、1963年には中華民国の国家公園（国立公園）制定の計画が浮上したが、この時は棚上げとなった。正式に国家公園となったのは1985年のことであった。

陽明山を彩る植物たち

陽明山の四季は常に花とともにあると言っている。

陽明山地区は標高がある程度高いこともあり、低緯度な割には冷涼な気候である。植生については温帯性で、また、季節風の影響も強く受けるため、この地における植物の研究は盛んに行なわれていた。

春は最も美しい花の季節とされている。梅や桜、色鮮やかなツツジなどで知られ、中でも緋寒桜は、憂鬱な天候が続く冬の暗さを忘れさせてくれる存在だった。これらの植物は日本統治時代に植樹が盛んに行なわれた。いずれも日本本土より一ヶ月ほど早くシーズンを迎える。その光景は現在にも受け継がれ、大地を美しく彩る様子をカメラに収める人々が集まってくる。

5月には早くも梅雨を迎え、これが過ぎると、夏を迎える。この時期は西南からの季節風が吹くために雨が多い。また、海拔が高いため、天候の変化は大きく、雨上がりの虹の美しさはこの時期の風物詩である。

台風シーズンを経て秋が訪れると、ススキの季節となる。台湾ではススキは北部のみに見られ、ここ以外では新北市の金瓜石や草嶺古道などが名所とされている。また、陽明山の場合、うっすらとではあるが、紅葉が楽しめることも特筆すべきことだろう。

冬は東北季節風の影響を受ける季節である。台北市や基隆市と同様、この時期はそれなりの冷え込みとなり、連日のように降雨が見られる。低温

高湿の状態となるため、霧がよくかかる。また、寒波の到来によって、まれではあるものの、七星山や大屯山などでは雪が降る。亜熱帯に属しながらも積雪が見られることは珍しく、雪化粧した姿を眺めにやってくる行楽客でちょっとした賑わいとなる。

なお、日本人は台湾各地の木材を伐採する際、必ずや植林を励行してきた。ここでは木材の伐採は行なわれなかったが、造林に関しては熱心に進



竹子湖（「湖」は盆地を示す台湾語）には原種田事務所が設けられ、米の品種改良と研究が進められた。日本統治時代の古写真より。



陽明山では換金性の高い花卉栽培が盛ん。「海芋（カラー）」をはじめ、今や地場産業として定着している。

められており、クロマツやアカシア、楓香などが植えられた。これらも陽明山の名物となっている。

草山（陽明山）の歴史

草山という地名は清国統治時代にはすでに文献などに見られる。日本統治時代を経て、戦後も引き続きこの地名は使われていたが、1950年3月に明国の儒学者・王陽明から「陽明山」と改名された。正直なところ、この地と王陽明には何ら関わりはないが、蒋介石率いる国民党政府の独裁時代、こういった地名改正は統治者の交替を台湾の人々に植えつける効果を狙い、各地で行なわれた。

この一帯はかつて硫黄の採掘が行なわれていた。硫黄は火薬を製造する際に用いられ、重宝された。台湾産の硫黄は良質なため、遠く欧米までもその名が知られていたと伝えられる。

硫黄採掘の端緒となったのは清国統治時代、郁永河という人物が台湾北部に硫黄の埋蔵を調査した時に遡る。この時にはすでに現在の行義路（紗帽谷温泉一帯）や陽明山付近まで到達している。その後長らく、火薬製造を取り締まるべく、硫黄の採掘は禁止されていたが、台湾巡撫（知事）の劉銘伝の時代には官営事業として採掘が復活している。

日本統治時代を迎えると、採掘の中心は七星山一帯にあったが、労働者の移入が進み、人口増加が進んだ。この頃は農地の開発も大幅に進み、冷涼な気候を生かした野菜栽培が盛んとなった。現在も陽明山一帯では野菜料理を供するレストランを頻繁に見かけるが、これらは味の良さで知られ、観光客の呼び込みに大きく貢献している。

日本人による草山の温泉開発は明確な記録はないものの、1909（明治42）年頃に始まったと推測される。北投に比べると、やや開発が遅いのは、領台当初、この一帯には土匪が跋扈しており、その対策に追われていたからである。しかし、その



冷水坑の様子。地殻の間から吹き出す噴気孔は域内で数カ所に見られた。日本統治時代の絵はがきより。

後の発展はめざましく、1913（大正2）年には公共浴場が設けられた。そして、旅館のほか、別荘や保養所などが年々設けられるようになり、温泉街が形成されていく。

道路については、投降させた土匪を使って工事が進められた。そして、以下に述べる皇太子行啓の際にも、大がかりな整備が進められた。

皇太子の台湾行啓と御大典事業

前回は触れたように、1923（大正12）年、当時、皇太子で摂政の地位にあった昭和天皇が台湾を行啓している。一行は4月12日に横須賀を出航した後、16日に基隆に到着。その後、27日までの間、台湾各地を巡った。

皇太子が北投を訪れたのは4月25日水曜日午前のことだった。一行は台湾総督官邸（現台北賓館）を出発した後、士林経由で草山に向かっている。草山ではこの行啓のために設けられた貴賓館（2013年現在修復工事中）で休憩をとり、13時5分に北投へ出発している。

皇太子行啓に際しては、いくつもの事業がその準備として行なわれている。草山では道路の整備はもちろんのこと、貴賓館の造営をはじめ、電灯や電話の設置が進められた。

現在、陽明山から金山へ向かう途中、道路の脇に「行啓並御成婚記念造林地」と刻まれた石碑が



道路脇に残る造林記念碑。草むらに埋もれているが、保存状態は良好である。



行啓に際して設けられた貴賓館。日本統治時代の絵はがきより。

残っている。1934（昭和9）年3月に建てられたもので、ほぼ完全な形で残っている。これは七星山や大屯山の一带に大規模な植林を行なうというもので、10年計画のものだった。

なお、面天山には北投の住民によって建てられた「皇太子殿下行啓碑」があったが、これは戦後、国民党政府によって文字が削り取られてしまっている。

景勝地として名を馳せた羽衣園

日本統治時代に発行された旅行案内書などを見ると、草山における温泉の条件は日本屈指のものであるという記述を見かける。その根拠として挙げられているのは、広い地域に泉源が点在してい

ることのほか、湯量が豊富なこと、交通至便であること、暑い台湾において避暑を兼ねられること、付近に清遊に適した歩道が数多くあることなど、枚挙にいとまがない。

草山へのアクセスは台北市内からバスを利用するパターンと淡水線士林駅からハイヤーを利用する場合の二つが知られていた。通常は台北からバスを利用することが多かったというが、後には道路の改良工事が施され、域内を日帰りで一巡できるようになった。

草山の温泉街の中心となっていたのは台北からのバス乗り場一帯であった。バスは巴（ともえ）自動車商会によって運営されており、平日は13往復、日曜・祝日の午前中は30分おきに便があった。バスは士林経由と北投経由があった。昭和12年の時点では、所要時間が前者30分、後者45分となっている。また、巴自動車商会は草山に旅館も経営していた。なお、日本統治時代の痕跡は残っていないが、バスが発着する地点は、今も日本統治時代と同じ場所である。

陽明公園についても紹介しておきたい。ここには日本統治時代、山本義信という人物が所有する羽衣園があった。山本は海山郡（現新北市中和区一帯）にて炭鉱を経営し、後に板橋街長、台北州議会議員などを歴任した人物である。街長時代は地域の水道インフラの整備に尽力したほか、台北帝国大学（現国立台湾大学）に平戸ツツジを寄贈したことで知られている。

なお、草山という地名は長らくバス乗り場付近を示すに留まっていた。その北側に位置する土地は大庄と呼ばれ、これが山本義信の所有地であった。広さは10万坪におよび、公園のほか、別荘などが並び、松と桜、梅の植樹が施されていた。

羽衣園の敷地内には四箇所の泉源があったほか、随所に溪流や湧水があり、水に恵まれた土地だった。そして、先にも述べたように、桜を筆頭とし、ツツジや桃などが数多く植えられていた。

これらはいずれもその姿を留めており、四季を問わず、訪れた行楽客を癒している。

また、園内には清瀧神社と呼ばれる祠があった。祭神に天照大神のほか、大国主神（おおくにぬしのかみ）、少彦名神（すくなひこなのかみ）、大山積神（おおやまづみのかみ）に加え、瀬織津姫神（せおりつひめのかみ）を祀っていた。

瀬織津姫神は災厄抜除の女神であり、祓神や水神として知られるが、人間が山野を切りひらいて自然を破壊する罪を自らが負って人々の難を救うという神でもある。主神はあくまでも天照大神だったが、瀬織津姫神もまた、重要な祭神であったことは疑いない。

現在、清瀧神社の拝殿や本殿の痕跡は残ってい



陽明山は花の名所として知られている。桜や梅と並んでツツジの名所にもなっている。これを台湾に持ち込んだのは羽衣園の所有者・山本義信であった。



現在は陽明公園と呼ばれている羽衣園。ここには大きな花時計があり、記念撮影を楽しむ人々が集まっている。

ないが、鳥居がわずかに残されている。

陽明山教師中心—旧草山衆樂園

台北から路線バスに揺られて陽明山へ向かう。古くから台湾指折りのいで湯だったこともあり、数多くの湯治客が訪れていた。保養所や別荘が多かったため、活況という意味においては地味な印象だったというが、やはり温泉地としての知名度は高かった。

バスが陽明山に到着する前、かつて衆樂園と呼ばれていた公共浴場がある。ここは台湾屈指の娯楽施設で、旅行案内書では必ず紹介されていた。この建物が竣工したのは1930（昭和5）年10月31日のことである。正式にオープンしたのは同年の11月25日だった。その後、台北近郊の景勝地として草山の名が広まっていくと、この建物も絵葉書などの定番の構図となっていった。

竣工時、各メディアはとりわけ大きな扱いでこの建物を報じた。敷地面積は3614坪、建物は564・8坪というもので、どっしりとした構えを見せていた。用材はこの一帯で切り出された安山岩が用いられ、落ち着いた色合いとなっていた。石塊を組み合わせた壁面や広々とした館内など、注目したい箇所は少なくない。

この建物の工費総額は15万3千円と伝えられている。外壁は草山産の硬石が用いられ、鉄筋コンクリート構造、内壁は漆喰塗となっていたという。当時は珍しいリノリウム床となっていたのも特筆される。これは天然素材を用いた建材で、抗菌性が高く、耐久性にも優れていたため、病院や学校、公共建築などで用いられた。日本では1920年頃に最初のリノリウム材が商品化されたと言われ、この建物の場合、日本に出回りだして、すぐに採用されたことになる。こういったところからも、衆樂園の位置づけ、そして台北州の意気込みがうかがい知れる。

設備については、男女それぞれの大浴場、児童

浴槽、ビリヤード室、休憩室、娯楽室、食堂、売店、特別室などがあり、娯楽室には囲碁、将棋、各種図書、新聞、雑誌などを備え、浴客は自由に閲覧できたという。さらに、八畳敷き2室、六畳敷き8室の家族室も設けられていた。

オープン時に報道された台湾日日新報の記事によれば、開館時間は午前8時から午後8時までで、年中無休。入場料は大人（12歳以上）20銭、小人（6歳以上12歳未満）10銭で、入浴だけなら大人5銭、小人3銭だった。家族室の使用料は八畳敷1室80銭、六畳敷1室50銭となっていた。なお、30人以上の団体に対しては3割ないし7割の割引があった。

しかしながら、終戦を迎え、日本人が台湾を去ると、国民党政府はこの施設を敵性遺産という名



陽明山教師中心は堂々とした風格をまとう建物である。現在は教員の研修センターとして使用されている。



この建物には付近一帯で切り出した安山岩が多用されている。日本統治時代に発行された絵はがきより。

目で接收し、温泉浴場としての歴史は途絶えることになる。建物は「陽明山教師中心」という教職員向けの研修センターとなり、管轄も台北市に移された。シンボルとなっていた円形の大浴場もすでになく、現在、建物の中に浴場の設備はない。石造りの重厚な風格に触れることだけが、かつての姿を偲ぶ唯一の手段となっている。

草山行館—旧台湾製糖株式会社招待所

陽明山国家公園内には日本統治時代に建てられた貴賓館も残っている。草山行館は台湾製糖株式会社が所有していた建物である。建坪 549 坪で、正面部分は石造りだが、後方は木造家屋となっている。玄関部は付近一帯で切り出されたという自然石で作られており、威厳を感じさせている。

この建物は私企業が設けた招待所だが、1923(大正 12) 年に摂政の立場で台湾を訪れた裕仁皇太子が立ち寄ることを想定していたという。結果的には皇太子がここを訪れることはなかったが、念には念を入れた造りであったのは言うまでもない。

館内は採光と風通しが強く意識されている。こういった保養施設は屋内のどこにいても自然光が差し込んでくるように工夫されており、中庭が設けられていることが多い。このスタイルは日本本土であれば大正時代、台湾であれば昭和初期に建てられた別荘や保養所などに散見できる。

終戦を迎え、この建物も敵性遺産として国民党政府に接收された。そして、1949 年からは蒋介石の住居として使用された。現在の名で呼ばれるようになったのもこの時からである。草山という地名は「陽明山」と変えられたが、この建物については日本統治時代の地名がそのまま付される形になっている。

現在は台北市が管理する古蹟となっており、2003 年からは芸術展示空間として使用されている。しかし、案内板やパンフレットでは蒋介石と



樹林の中に忽然と現れる草山行館。行館とは中国語で貴賓館を意味する。付近には別荘のような家屋が並んでいる。



現在は公共スペースとなっており、絵画展や書画展などが随時開催されている。

その妻である宋美齡が暮らしたという一面だけが取り上げられ、建築や歴史的見地からの紹介は少ない。それでも、陽明山を訪れたなら、ぜひとも足を運びたい歴史の現場ではある。

なお、この建物は 2008 年 4 月 7 日に火災に見舞われ、大部分が焼失している。しかし、蒋介石に関わる歴史遺産という名目で、台北市は火災後、すぐに修復を決め、実行に移したのは記憶に新しい。

草山第三水源地と水管橋

最後に、ほとんど知られることなく、それでいて、今もなお立派に機能を果たしている日本統治時代の遺構を紹介しておきたい。それは陽明山と

北投を結ぶ道路沿いにある水源地で、亜熱帯特有の濃い緑の中に存在している。

日本統治時代、草山には三カ所の水源が設けられていた。ここはその一つで、海拔 303 メートルの地点にある。北投から草山に向かう道路は草山道路と呼ばれていたが、ここには戦前からバスの便があり、舗装と拡張工事はされているものの、そのルートは今も変わっていない。途中には展望台もあり、素晴らしい眺望が楽しめる。水源はこの道路から石段を下りていった先にある。

ここは陽明山第三湧泉と呼ばれている。日本統治時代の名称は草山第三水源地となっていた。1925（大正 14）年に計画がたてられたが、使用開始となったのは 1932（昭和 7）年 3 月からだった。

ここは平時は水質保持と安全管理上、閉鎖されており、域内に立ち入ることはできない。訪れる人は極度に少ないようで、私が取材に赴いた際も草が生い茂っており、足元をしっかりと見ていないと危険な感じだった。

水源室は水管橋のたもとに位置する小さな建物である。しかし、その外壁は切り出された安山岩とコンクリートを用いて造られており、堅固な様子が容易にうかがえる。湧水量は非常に豊富で、勢いよく流れ出てくる清水は圧巻なかぎりだった。水道局の資料によれば、水量は毎日 8 千から 1 万 2 千立方メートルあるという。

この水源室の正面にはかつて「湧泉臺」と記された扁額が掲げられていたという。残念ながら、現在はその文字を確認することはできない。ちなみにこれを揮毫したのは台北市長や新竹州知事、専売局長を務めた田端幸三郎だった。

水源室の前には一直線にのびる橋がある。名称は草山第三水管橋といい、送水を目的に設けられたものである。竣工は 1929（昭和 4）年 6 月 12 日。橋の長さは 48.4 メートルで、幅は 1.99 メートルとなっている。橋の上に立っていると普通の橋のように思えてしまうが、足下には水管が埋め



この水道設備が使用されたのは 1932（昭和 7）年からだった。それ以来、台北市民の水瓶として人々の暮らしを支えてきた。



第三水源は水質の良さで知られ、東洋随一の湧泉とも評されていた。濾過を要さずそのまま飲用できたという。1943（昭和 18）年 7 月にはやや下流に第四水源も設けられた。



草山水道系統では三座の橋が設けられていた。ここはその中で最も新しい。すぐ脇には滝が見られる。

込まれており、勢いよく清水が流れている。

この橋は松溪という溪流が形成した谷の中にある。橋のすぐ脇には高さ約30メートルという滝が眺められる。なお、この河川水は多量の鉱物を含んでおり、河原の石は赤茶色に焼けている、水源室内の湧水とは全く水質が異なっており、飲用はできないというのも興味深い。

この水道施設の設計者は佐野藤次郎という人物である。日本ではダム工学の権威として知られており、台湾水道の父と言われたウィリアム・バルトンの弟子でもある。このように、日本を代表する技術者が台湾の水道の設計に関わっていることも、台湾の歴史をたどっていく上で押さえておき



北投・草山付近の地図（鉄道旅行案内より）

たい事実である。

先述したように、水源の管理上、外部への公開はされていないが、現在はこの水管橋のみならず、各種水道施設が古蹟の指定を受けており、湧水池から水管、貯水池など、全14カ所の施設が現役で使用されたまま、保存対象となっている。

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックは35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けており、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動も行なっている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『観光コースでない台湾』（高文研）、『台湾に残る日本鉄道遺産』（交通新聞社新書）など。編著に台北生活情報誌『悠遊台湾』がある。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』『台湾土地・日本表情』（玉山社）などの著作がある。昨年5月には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』（宝島社）を手がけた。最新刊は共著『日本人、台湾を拓く。』（まどか出版）。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>